説教要旨　「神のものを神に」

ルカによる福音書　２０章２０～２６節

ローマ帝国に支配されていたユダヤ人は、自分たちを支配する税を納めることになっていました。異教徒のローマ皇帝に税を納めることは、唯一の支配者である神の主権を侵す重大な律法違反であるとして納税を拒否する、《熱心党》と呼ばれる過激な原理主義的宗教運動がユダヤ教徒の中に拡がりつつありました。エルサレムの神殿に両替商がいて、神殿用の貨幣がそこで扱われていたのは、自分たちの神はローマ皇帝に支配されてはいないという思いの表れでもあったのでしょう。そうは言っても実際にローマに睨まれて介入されてしまえば、簡単に押しつぶされてしまうことは火を見るより明らかです。ローマとの妥協によって辛うじて自治を保っている神殿指導者は、熱心党の運動にはきわめて神経質になっていました。

「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」（22 節）との質問に、イエス様が是と答えたならば、ローマの支配に屈服する偽教師として民衆からの支持を失います。反対に否と答えたならば、納税拒否運動の扇動者としてローマ総督に訴え、処刑させることができるのです。この罠を見抜いてイエス様は、皇帝に税を納めることを認めると同時に、「神のものは神に返しなさい」とも言われました。ローマ皇帝に税金を納めてその支配を認めたところで、神の支配は揺るがない。神の支配は皇帝の支配すらも包み込んでいる。だから皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。と言われたのです。

直前で語られているぶどう園と農夫のたとえの構図の中に皇帝を位置づけるならば、皇帝に税金を納めることが律法に適っているかどうかの問いは、このぶどう園の主人の立場に神を置くか、ローマ皇帝を置くかという問いです。あなたの主人は神か、皇帝か、という二者択一です。しかしイエス様は、強大な権力を持つ皇帝であっても、ぶどう園を借り受けた農夫の一人にすぎないということを示されるのです。借り物のぶどう園の中で、雇われ農夫どうしが勢力争いしているにすぎないことを。

（２０２０・７・２６　説教者：稲垣真実）